

JELA NEWS

ジェラニュース 第36号 2015年 4月15日発行 発行責任者 森川 博己

一般社団法人日本福音ルーテル社団 〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿1-20-26 Tel.03-3447-1521 Fax.03-3447-1523 jela@jela.or.jp www.jela.or.jp

難民支援／世界の子ども支援／ボランティア派遣／リラブレカリア(祈りのたて琴)研修講座／奨学金制度／宣教師支援

私たちは、キリストの愛をもって、日本と世界の助けを必要とする人びとに仕えます

「お前たちはわたしを飢えていたときに食べさせ、のどが乾いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ。はっきり言うておく、私の兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、私にしてくれたことなのである。」 マタイによる福音書 25章35節～36節40節



JELA インド・ワークキャンプ開催

2月、インドに日本からボランティアを派遣しました。スタッフ3名を含む計16名が、義足を作るなど奉仕を行いました。詳しくは5ページをご覧ください。

【この号にはこんな記事が】

宣教師支援「神様の召しに応える」キャロリン・キーナン、2015年世界の子ども支援チャリティコンサート案内 ……2～3 東日本大震災被災者支援「JELAの奨学金で夢がかなった」(佐藤和香) ……4 インド・ワークキャンプ「手を差し伸べること」森奈生美 ……5 難民支援「カトリック教会の社会教説と難民保護」小山英之、「難民支援の現場から見えてきた課題」土岐茂里 ……6～7 大阪LOVEコンサート報告、第3回川柳ひろば入選作発表、支援者一覧ほか ……8

神様の召しに応える

キャロリン・キーナン



毎年秋にアメリカから短期宣教師(J3)が何名か来日します。JELAの支援で日本語レッスンなどを半年間受けた後、そのほとんどは熊本の九州学院かルーテル学院中学・高等学校で2年間英語を教えます。また、熊本地区の日本福音ルーテル教会のための、さまざまな奉仕に携わります。九州学院で2年間の奉仕を終えるキャロリン・キーナンさんは、帰国後に神学校に入学し、牧師になる道を歩まれます。以下の便りは、残りわずかとなった日本でのJ3生活の合間に書いてくださったものです。



＋ 16歳のときに与えられた思い

16歳のとき、教会で奉仕をするというビジョンが与えられました。その年、アメリカ原住民の方々が居住する地域でワークキャンプを初めて体験しました。そして、自分は人々に仕えることが好きなことに気づきました。体力のいる仕事だったにもかかわらず、それに喜びを感じる自分を見て、これこそやりたいことなのだと思ったのです。とは言っても、まだ16歳。将来どうやって人々に仕えていけばよいのか、よくわかりませんでした。

＋ 来日を前にした喜びと不安

英語を2年間教える宣教師として日

本に来ることになったとき、ワクワクしました。アメリカを出たことがなく、そんな日が来るのを待ちこがれていたからです。派遣メンバーに正式に選ばれたときは、天にも昇る気持ちでした。

ところが、出発の日が近づくにつれ怖くなってきました。日本語がしゃべれず、日本文化もよく知らなかったからです。たった2年間とは言え、仲の良い家族と離れるのもさびしいことでした。

＋ 大きな勘違い

他にも問題がありました。宣教師がどういう存在かまったくわかってなくて、来日後数か月以上、その間違った宣教師観で暮らしていました。日本人に会っても、自分はタダの英語教師だと告げるだけで、教会の奉仕については触れずじまいでした。

日本の生活が長くなるにつれ、教会の人や自分が教えている学校の人たちが、少しずつ私の思い違いを解いてくれました。それからというもの、教会で奉仕をすればするほど、J3の任務終了後も教会で働き続けたいという思いが膨らみました。

＋ 勝手な牧師イメージ

自分が牧師になるかどうかについては、真剣には考えずに生きて来ました。それだけでなく、牧師というものについても大きな誤解をしていました。アメリカで出会った牧師先生はみんな、私よりもずっと年上でしたし、私の思い描く牧師像は、ものすごく頭がよく、人への憐みの心を備えていて、聖書は端から端まで何でも知っているし、どんな時でもその場にピッタリのことを言える、そんなイメージでした。人間を超えた存在、想像もつかない高みにそびえる存在だったのです。



写真中央:キャロリン・キーナンさん

＋ 初めてづくめの日本での体験

日本に来て初めて、自分と同年代の牧師や神学生と仲良くなりました。教会で一人前扱いをされたのも初めてでした。牧師と一緒に飲みに行くのが初めてなら、プリクラやカラオケを牧師と楽しむのも初めて。キリスト教について自分の思ったことを言うように促され、教会で教えるように頼まれたのも、生まれて初めてのことだったのです。

日本に来たことで、牧師も人間、スーパーマンではないことがわかりました。25 歳になるまでそんなこともわからなかったの?! と言われるかもしれませんが、小さいときにインプットされたことは簡単には頭から消えないものなのです。

＋ 日本の教会に行った最初の日

日本で生活する私にとって、教会は我が家にいる気分になれる場所です。東京では小石川教会に集いました。最初の日曜日は大変でした。地下鉄で迷子になり一時間近くウロウロしました。教会へ向かう車内では、「はじめまして、キャロリンです。よろしくお願いします」と繰り返しつつやっていたので、日本人の乗客は、気持ちの悪い外国人だなと思ったことでしょう。

やっと教会に着いた私は、勇気を振り絞って玄関に足を踏み入れました。そしたらどうでしょう。そこには大きな祝福と喜びが待っていたではありませんか! アメリカの田舎から東京に来て以来、ずっと居心地の悪い思いをしていたのに、小石川教会ですぐに、その一員であるという気分になったのです。

＋ 教会が居場所に

日本の教会生活はアメリカのそれとほとんど変わりませんでした。もちろん礼拝は日本語で行われましたが、流れは目を閉じていてもわかるし、スリッパ履きではあっても、信徒が座る木製の椅子はアメリカと同じものでした。台所風景もアメリカと同じで、愛すべき婦人信徒の方々がランチの準備に大わらわ

なものでした。

小石川教会に話を戻すと、礼拝に集った最初の日、椅子から立ち上がって「はじめまして」と言おうとした途端、歓迎の拍手が沸き起こりました。うまく挨拶できるかなと緊張でガチガチになっていた私は一瞬で心が解放され、涙を流さんばかりでした。こうして仲間として受け入れてもらい、日本の教会生活がスタートしたのでした。

熊本の教会でも同様の体験をしました。健軍教会や熊本教会の英語礼拝で、ここが私の居場所だとつくづく感じました。学校で教える仕事も好きですが、教会での奉仕は、それとは比べものにならないほど私には魅力的なものなのです。教会での奉仕こそ、私に与えられた使命だと感じています。

＋ 神様のなさったこと

キリスト教宣教の召しは、16 歳で経験したアメリカでのワークキャンプで与えられました。ところが私は、その召しについて考えようとせずに避けてきました。怖かったからです。いまでも、それは変わりません。自分が牧師にふさ

わしいとはどうしても思えないのです。こんな私の言い訳に神様はあきあきなさったのでしょうか。だから日本に送り、教会で働くとは実際はどういうことか、体験させようとなさったのだと思います。そのことによって、神学校で学び牧師として奉仕するときに必要な勇気も、日本で身に付けさせようとなさったのだと感じています。

＋ 将来の願い

日本の経験を通して神様は、教会が私の想像をはるかに超えて大きく豊かなものであることを教えようとなさいました。またこの 2 年間を通して、私が何者であるかを分からせ、私が創造された目的をわからせようとなさったとも感じています。

今の私の願いはただ一つ。この召しに忠実に従い、日本での学びを大切にして、これからの人生を歩んでゆくことです。

いろいろ教えてくださった日本の皆様、ありがとうございます。おかげで私は自分が必要としていた勇気を与えられました。心より感謝しています。

【世界の子ども支援チャリティコンサート2015】会場と曲目のお知らせ

第12回世界の子ども支援チャリティコンサートを5月から下記の日程で、日本福音ルーテル教会を会場に行います。

演奏者はおなじみの上野由恵さん(フルート)と、2年ぶりに登場する新井伴典さん(ギター)のコンビです。今回のプログラムには、「鳥の歌～カザルス」「ブエノスアイレス組曲～プホル」「『三角帽子』より3つの小品～ファリャ」「ハバネラ様式の小品～ラヴェル」などラテン色豊かな曲が盛り込まれる予定です。皆様のご来場を心よりお待ちしております。

■5月 9日(土)	14:00～	岡崎教会
■5月10日(日)	13:30～	保谷教会
■5月22日(金)	19:00～	小鹿教会
■5月23日(土)	17:00～	藤が丘教会
■5月29日(金)	19:00～	甲府教会
■6月12日(金)	19:00～	熊本教会
■6月13日(土)	14:00～	鹿児島教会
■6月14日(日)	14:00～	長崎教会
■6月27日(土)	14:00～	刈谷教会
■6月28日(日)	17:00～	松本教会
■7月 5日(日)	14:00～	神戸東教会



※会場・時間については変更になる場合がございます。JELAもしくは会場教会にご確認ください。

JELA の奨学金で夢がかなった

尚絅学院大学総合人間科学部子ども学科 4 年生(執筆当時)

佐藤 和香

東日本大震災発生から 4 年が経ちました。被災地支援の一つとして JELA は、被災大学生の佐藤和香さんを入学時から 4 年間支援してまいりました。佐藤さんはこの 3 月に大学を卒業され、4 月から希望していた幼稚園で働いていらっしゃいます。

以下の便りは、3 月 18 日の大学卒業式を迎える前に送っていただいたものです。

大学入学からあっという間に四年が過ぎ、卒業となりました。四年間勉学に集中することができたのも JELA 奨学金を受けることができたからだ、心から感謝しております。

私が大学四年に上がる際、弟も私と同じ大学へ入学しました。私が JELA から学費の全額支援を受けることができていなかったら、弟は夢を追うために大学へ入学することはできなかったかもしれません。弟は人間心理学科へ入学し、心理カウンセラーへの夢を追っています。

就職内定・卒業が決まり、母を始め家族みんなが胸をなで下ろしています。私も希望していた幼稚園から内定をいただ

き、研修をしております。夢を叶えることができたのも JELA 奨学金を受けることができたからだ、とても感謝しています。

三年生からは保育実習・幼稚園実習が始まりました。初めての現場であり、緊張と不安で失敗を繰り返し、押し潰されそうになりました。小さな命を預かるという仕事の責任の大きさを痛感しました。また、この二つの実習を通して、保育士ではなく幼稚園教諭になりたいと思うようになりました。理由は多数ありましたが、一番は、短い時間であっても、きちんと子どもたちと向き合いたいと思ったからです。保育所のように長時間保育をしていると、周りに目を配り切れていない自分がいることに気がきました。そのため幼稚園実習へ行き、幼稚園へと就職希望先が変わりました。

四年生からは卒業論文に少しずつ取り組むようになりました。東義也先生のもと、それぞれが自由なテーマで研究を進めました。私は「共感」について研究をしました。子どもとコミュニケーションを取る上で「共感」が大切になってくるのではないかと考えたからです。研究を進めていく中で、テレビアニメの「ドラえもん」と「クレヨンしんちゃん」を取り上げました。長い間親しま

れ、子どもと一緒に気軽に见られるためです。この研究を通して、幼い頃感じた共感の有無は、小学校・中学校になった頃に影響が出てくると考察しました。まだ研究途上であり、実践体験を増やしていき、より学びを深めていきたいです。



三月になり、幼稚園での研修が始まりました。大学入学当初は地元での就職を希望していましたが、家族と相談の結果、大学がある宮城県内での就職となりました。務める地域が違って、子どもたちのために働くということに違いはありません。かねてより希望していた保育業に就職できることを、とても嬉しく感じています。私だけでなく母、祖父母もとても喜んでくれ、勤務地が地元でなくとも応援してくれています。少しずつではありますが幼稚園に訪問するようになり、机上の知識ばかりでなく、学ぶことがたくさんあることを実感しております。

本格的な勤務は四月からです。子どもたちと少しずつ接しながら慣れていこうとしているところです。配属はまだ決まっていますが、いずれにせよ子どもたちのために尽力していきたいと思っています。新米保育者として先輩方、子どもたちからたくさんのことを学び、子どもたちから信頼される保育者になりたいと思います。また、JELA 奨学金で支えていただいた恩を、幼稚園の子どもたちのために働くという形で返していきたいです。(了)

JELA は東日本大震災被災者支援として、仮設住宅等でのスピリチュアルケアを重視しています。今後は、リラ・プレカリア修了生によるハーブと歌の祈りを実践してまいりますので、ご支援のほどよろしくお願い申し上げます。



尚絅学院大学オーケストラでフルートを担当。右から二人目が佐藤さん

インド・ワークキャンプを2月12日(木)～22日(日)11日間の日程で行いました。出発直前には、IS(Islamic State.いわゆる「イスラム国」)による邦人殺害事件がありました。インド総領事館に問い合わせるなど現地の事情を把握した上で、参加者には細心の注意を払って行動してもらい、スタッフ3名を含む計16人が無事に帰国しました。皆様のお祈りを感謝いたします。

今回のキャンプは、CRHP (Comprehensive Rural Health Project= 病院を基盤として総合的に人々の健康維持に取り組む非営利組織)で主に義足作りのボランティアをしました。

この号では、ルーテルむさしの教会員で大学生の森奈生美(もり・なおみ)さんの感想文を掲載いたします。他の参加者の感想は、次号(8月発行)にまとめて掲載予定です。

【ラトナマラさんとの出会い】

今回のワークキャンプでは、私たちが滞在した CRHP で行われている素晴らしい働きの数々を、存分に感じ取ることができた。CRHP はインドの抱える問題を受け入れ、貧しさの中にある人々に手を差し伸べることによって、その人の人生を変え、その村を変えていく。

中でも、CRHP が干ばつ地域での農業モデルとして運営している農場で働く女性の話は、私にとって CRHP の働きの大きさを鮮明に伝えるものとして心に響いた。その女性の名はラトナマラ(写真下)、「神様の首飾り」という意味だ。その名にふさわしく、彼女の瞳は美しく輝き、話す姿は大変凛としていた。彼女は、自らの過酷な人生とそこにおける神様の導きを語ることで、モデル農場における CRHP の働きと、インドの抱える根深い問題の一つである女性の自立について示してくれた。

【貧困と HIV】



ラトナマラの家は貧しく、他の多くのインドの貧困家庭の例に漏れず、娘よりも息子を大切にしたい。女の子だからと、初期に教育を打ち切られそうになった。それでも良き教師との出会いから、なん

とか、上の姉妹より長く学校に通うことができた。しかし、慣習として女性側の家が負担するダウリー(身支度金)制度のため、皮肉にも高等教育を受けたが故に結婚相手探しは困難を伴い、やっと見つかった夫も結婚後 HIV 感染が判明し、苦難が続いた。

彼女と夫と子供は、HIV を理由に、行く先々で人々から、家族からさえも拒絶された。仕事や住む場所にも困るほどであった。人々から避けられ続けた上に、旦那と子供を亡くすと、生きる意味を失い、彼女は毒を飲んだ。病院に運ばれなんとか一命を取り留めた彼女は、息子の死亡日を記録しに来たヘルスワーカーを通じて、CRHP と出会った。

CRHP の提案によりモデル農場で働くよ

「手を差し伸べること」

森 奈生美



うになってからも、彼女の傷は簡単には癒えなかった。ところが、CRHP の医師らと対話を重ねる中で、「今までの人生の中で、神様を信じなくなっていた」という彼女も、神と出会い、かつて自らを拒絶した人々を赦すことができるまでになった。心のケアと薬が効き、ラトナマラは現在、モデル農場で責任ある仕事をしながら、養女を立派に育て、更には HIV 患者のカウンセリングもしている。

彼女の人生の過酷さを、私は知らない。話に聞いて想像することはできても、彼女の幾度もの絶望に共感することも、HIV を肩代わりすることもできない。私ができるのは、彼女に敬意を示し、その強さに学び、自らの糧とすることである。CRHP が彼女に手を差し伸べ、彼女がいま他の HIV 感染

者に手を差し伸べているように、私も誰かに手を差し伸べるのだ、という気持ちが湧いてきた。あとはこれを行動に移すことである。

【「手を差し伸べる」生き方】

インドの抱える貧困、その背景にある数々の問題の根深さに、私は大きな衝撃を受けた。課題だらけのインドの現状に、世界の厳しさを感じた。しかしその一方で、義足作りをはじめとし、種々のワークを通じて、CRHP の「手を差し伸べる」活動に交わり、加わる経験を得た。そして、使命を持って生きる人々の持つ力強さ、与える影響の大きさを知った。

インドに限らず、差し伸べられる手を必要としている人は、世界に沢山いる。恵まれた環境にあっても、人は必ず誰かの手が必要になるときがある。両腕いっぱいを持ち物を独り占めするのではなく、いつでもずっと差し出せる手を持った生き方をしたい。インドに行き、そんな気持ちになった。

【私にできること】

ひたすらに恵みを受け続け続けた学生の身分を終え、社会人として働くようになる節目のこの時期に、インド・ワークキャンプに参加できたことを、大変感謝している。すぐにすべてを投げ打った奉仕の人生を決断できるほどの勇気はないが、これまで培ってきた少しの知識とこれからのサラリーマン生活で得られる経験を、ただただ自分のものにするのではなく、他者に差し伸べる手のエネルギーとしていきたい。CRHP のように一人の人生や一つの村を丸ごと救うことはまだ難しいが、微力ながらも貧しさや弱さの中にある人々の力になりたい。自らのことで手一杯になってしまったときには、CRHP の働きやラトナマラの話を振り返ることで、今の自分は誰にどんな手を差し伸べることができるだろうか、としっかり思い直す時間を持ちたい。

*JLA では今夏「アメリカ・グループ・ワークキャンプ」に14～20歳の青年を派遣します。応募締切は4月末日です。詳しくは、7ページをご覧ください。

難民支援

日本で難民支援に従事しているさまざまな組織の活動をこの紙面でご紹介していますが、今回は、キリスト教界にあつて積極的に社会問題に取り組むカトリック教会を取り上げます。ご寄稿いただいたのは上智大学神学部准教授の小山英之さん(イエズス会司祭)。

小山さんはイエズス会社会司牧センターを代表して、JELA も加盟する難民支援の連合組織『なんみんフォーラム』(FRJ=Forum for Refugees Japan) で活躍されています。FRJ には他にも、カトリック東京国際センター(CTIC)、カリタスジャパン、日本カトリック難民移住移動者委員会(JCaRM)といったカトリック系の組織が多数参画しており、以下の記事から、カトリック教会の難民支援の考え方の基盤を知っていただけると幸いです。

カトリック教会の社会教説と難民保護 イエズス会司祭

上智大学神学部神学科准教授

小山 英之



教皇レオ13世は、産業革命後の著しく異なる生活環境にある貧しい労働者階級の人々の境遇に対して深い気づかいを表し、1891年に回勅『レールム・ノヴァルム』を發布しました。それが教会を貧しい人々の側に置く、社会教説と呼ばれる最初の文書でした。

難民についてははっきりと言及されるのは、第2バチカン公会議を招集した教皇ヨハネ23世によってです。「わたしの心に神が植えつけた万人に向けての父としての愛により、わたしは政治難民の現象を考察するとき、深い悲しみを覚えます。この現象は、大規模なものになっており、その中には必ず、はかりしれない痛ましい苦しみと潜んでいます。(中略)ここで、政治難民が人間であり、人間としてのあらゆる権利が認められるべきであることを思い起こしたいと思います。本来所属していた政治共同体の市民権を喪失したことで、

難民がこれらの権利を失うようなことはいっさいありません。人間の権利の中には、自分と家族がより適切な将来を見いだしうと思われる政治共同体に移住する権利が含まれます。したがって、正確に理解された共通善が許すかぎり、政治共同体には移住者を受け入れる義務も、難民が新しい社会に溶け込むことを助ける義務もあります」(『パーチェム・イン・テリス』1963年、57)。

こうした社会教説を通して教会は、信仰とは、「霊的な次元にかかわることであつて、この世の事柄にはかかわらなくてもよいということではない」ということを訴え続けてきました。教皇パウロ6世は次のように述べています。「教会が解放を説き、そのために働き苦しむすべての人々と連帯するとき、教会固有の使命が、宗教的な分野にのみ限定され、人々の現世的問題は顧みない、ということは許されないのです」(使徒的勧告『福音宣教』1975年、34)

そうしたカトリック教会の歴史の流れの中でカトリックの修道会のひとつ、イエズス会の総長アルペ神父は、「何千人ものボートピープルと難民の窮状に強い衝撃を受け、心を動かされ」、コンパッション(憐みの思い)から1980年11月14日、『イエズス会難民サービス』(Jesuit Refugee service-JRS)を創設しました。それからJRSは34年間にわたって、難民たちと共にあり(accompany)、彼ら／彼女らに奉仕(serve)、彼ら／彼女らの人権を擁護してきました(advocate)。UNHCRのパートナーとして現在全世界50か国以上の国々で難民支援のためのさまざまな活動、教育支援、カウンセリング、精神衛生のプログラム、暴力に苦しむ女性を保護する場の提供などを行っています。ケニアのカクマ難民キャンプではアメリカの大学と連携してインターネットで大学の講義にあずからせ、卒業証書も授けています。日本では、『なんみんフォーラム』(FRJ)のメンバーに入れていただき、無料法律相談を提供しています。また、健康保険がなく、外務省から保護費も受け取れない難民申請者のためにマリア・メディカルサポート基

金を2013年11月に設立しました。1年間で約200件の申請があり、2,761,624円を使用しました。その他、カトリック東京国際センター(CTIC)も移住者・難民のためのさまざまな奉仕をしてきました。JELAの活動も同じく教会の貧しい人々へ奉仕する活動で、日本における難民保護の欠くべからざる重要な役割を果たされています。

現教皇フランシスコも回勅『福音の喜び』(2014年)の中で次のように訴えています。「新たなかたちで現れている貧困と弱さに密に接するために、心を碎かなければなりません。見かけ上それらは、具体的な益を直ちにもたらすものではありませんが、そこにおられる苦しむキリストに気づくよう、わたしたちは招かれているのです。すなわち、家のない人、依存症の人、難民、先住民族、孤独のうちに見捨てられてしまう高齢者などのことです。移住者の問題が、わたしにたちに特別な課題を突きつけています。わたしは、国境をもたない教会、すべての者の母である教会の司牧者であるからです。ですからわたしは、寛大に門戸を開くよう各国にお願いします。それは新たな文化的総合を創造しうるものです」(210)。



上の写真は、ローマのJRS本部に送られてきたクリスマスカードで、今も片づけられずに置かれているものです。イエス誕生の時に飼葉おけに使われた木は、彼が後に背負うことになる十字架に使われた木の予兆です。十字架にかけられたイエスを抱擁している像は、難民たちに同伴し、十字架にかけられた人々に愛の手を差しのべる教会の姿をとらえたものであり、私たちがそうありたいと強く願っています。(小山英之著、『教会の社会教説 貧しい人々のための優先的選択』、教文館、2013年参照)

難民支援の現場から見てきた課題

認定 NPO 法人難民支援協会

支援事業部 土岐茂里



難民と相談する土岐さん

私が仕事のなかで難民のAさん(仮名)と出会ったのは、太陽が照りつける夏の暑い日でした。今でもその日のことはよく覚えています。私はAさんと初めて一緒に病院に行くことになっており、病院近くの駅で待ち合わせをしました。日本語がすごくお上手で、道すがら、体調が良くないこと、ずっと家で一人で過ごしていることなどを話してくれました。一日じゅう誰とも話さない日もあり、今日も私と話すのが初めてだと話してくれました。

Aさんは東南アジアの出身で、日本に来てから既に数年経過していました。来日後に難民申請をし、法務省からの結果を待っている状況が数年間続いていた。今の日本の制度では、難民申請をしてからその結果が出るまでに、平均して2～3年かかります。Aさんは政府から生活費や家賃サポートを受けながら生活をしていましたが、その公的支援も数か月前に打ち切りになってしまっていました。在留資格がないために就労許可は得られず、仕事をするのができないため、自活することは困難でした。それで、弊社よりJELAにご相談させていただき、ジェラハウスに入居させていただくことができました。その後は、生活費は弊社でサポートしつつ、難民申請の結果が出るのを待つ日々が続きました。

ところが、あるときから、食欲がなく数か月間のうちに急激に体重が減少してしまい、また、以前はご自分で歩くことができていたのが、段々と歩くことも難しくなり、最終的には車いすで移動するようになってしまいました。在留資格がなく、国民健康

保険への加入もできなかったため、医療費の支払いが心配で満足に医療にもかかれないという状況でした。病状が心配なため、一度大きな病院に行ってみましょうとご本人と話し、東京都の無料低額診療事業を通して総合病院を探してもらうことになりました。

少したって受け入れ病院が見つかり、スタッフと一緒に受診することになりました。いろいろな検査をし、その結果、最終的に末期のがんが見つかりました。医師からは、病状の説明、積極的な治療は難しいとの話とともに余命についても言及がありました。ご本人は黙って医師の話に耳を傾けておられましたが、ショックだったと思います。受診後に病院のソーシャルワーカーを交えて話し、国にはご家族がおられ、少しでも残された時間を自分の国で家族と過ごしたい、本国に帰りたいとはっきりとした口調でおっしゃいました。

その後は、帰国が実現するよう、一緒に大使館と入国管理局へ行き、帰国に必要な書類を得るなどの手続きを弊社で進めました。ご本人は日に日に衰弱が激しくなり、一人で立ち上がることもできない状態になってしまったのですが、介護保険や介護ヘルパーなども使うことができないため、買い物・掃除・洗濯や入浴など身の回りの世話は、弊社スタッフとボランティアが週2～3回お部屋を訪問しサポートしていました。



リラ・プレカリアのキャロルさん

ある日、JELAがリラ・プレカリアのキャロルさんをジェラハウスに連れて来てくださり、ご本人のお部屋でハーブの演奏をしてくださったこともありました。その際にもらったハーブ演奏のCDを、ご本人は嬉しそうにお部屋で流されていたのを覚えています。



日本を去るAさん

がんが判明してから約2か月後、Aさんは弊社スタッフ同行のもと、本国へ帰国されました。この二人分の航空運賃はJELAがご支援くださいました。空港に迎えに来た家族をご覧になったときのAさんの笑顔は忘れられないものだった、と同行したスタッフから報告を受けています。しかし、ほどなくして本国のご家族より、Aさんが亡くなられたとの報告を受けました。残念なことです。Aさんにとっては生まれ故郷で家族に見守られながら息を引き取ることができて幸せだったと思います。

日本にいる難民の方々の高齢化も進んでいます。今後、日本に家族がいらないため、Aさんのように介護が必要になってくるケースも出てくると思います。言葉や文化の違いから日本社会からも孤立してしまい、必要な社会保障へのアクセスも限られていますが、少しでも多くの難民の方々が人間らしい生活ができるよう、弊社では政策提言も含めた働きかけを継続しつつ、生活・法律両面でのサポートを続けて参りたいと思っております。

締切り迫る!

2015 米国グループ・ワークキャンプ参加者募集中

参加者を5～10名前後募集します。

申込期限は2015年4月末日(必着)

◆ 派遣期間: 2015年7月23日(木)～8月5日(水)

◆ 内容: ニューヨーク州(またはその近辺の州)でのホームステイとワークキャンプ(家屋修繕、聖書の学び等を通して信仰的・人間的成長を促すプログラム)に参加。

◆ 参加費用: 20万円 *値下りました。

パスポート・ビザ取得費用、海外旅行保険費用、派遣決定者説明会会場及び出発・帰国時の集合場所(成田空港)から居住地までの交通費や、前泊・後泊する場合の宿泊費用については、上記の参加費とは別に個人負担となります。

◆ 問合せ・申込用紙請求先:

JELA アメリカ・ワークキャンプ係(窓口: 星崎、奈良部)

電話: 03-3447-1521 / ファクス: 03-3447-1523 /

Email: jela@jela.or.jp

※募集要項の詳細は、JELA ホームページ(www.jela.or.jp)でも公開中です。ご覧ください。皆様のご参加をお待ちしています。

投句は随時受け付けています。JELAまでメールまたは郵便でお送りください。また、JELAのホームページのニュースブログでも月に数回、難民支援川柳などJELAならではの川柳に関する話題を取り上げていますので、お読みいただくと幸いです。

真冬日に弱冷房車乗ってみる／お似合いでないと言われて気の晴れる／「泣き止んで」そつてしとけば止んだのに／捨てすぎて似たもの見れば足止める／老眼鏡？パソコン用と即答し／「お風呂出る」百を十ずつ数える子／定年に今再びのプロポーズ／ナッツターンこれで人生ノリターン／朝起きてラジオ体操操聞かばかり／心耳澄む牧師の説教お年玉／友見舞い運ぶみことばお福分け／世の光ナビしてくださるイエス様

以上の方々には副賞を差し上げます。なお今回から、選者ではなく「川柳ひろば」が独自に選んだ佳作(副賞なし)を掲載することになりました。今回は次の十二句です(柳名省略)。入選一步手前ですので、投句に励みましょう！

◎最優秀賞 子の継がぬ田畑に春がまた巡る(相模秋鶯)
○優秀賞 脳トレ本どれを買ったか忘れてる(羊野さん)
(選者) 柏木哲夫先生)
遺跡よりトイレ気になる聖地旅けんちゃん

坂仁／立山久美子／田中美紗子／田中淑子／JELC玉名教会／玉名ルーテル幼稚園／柘植恵利子／出村由利子／カトリック徳田教会／土居由美／JELC東京教会／東郷優子／轟木信二／鳥飼勝隆・豊子／中川浩之／長田ひろみ／中野邦子／中山純郎／那須幸／西垣親子／日本バプテスマ教会連合紀南地区女性委員会／野上きよみ／野田千恵子／野田マサ子／芳賀美江／萩雅子／JELC箱崎教会女性会／蓮子ゆり子／早瀬康平／東山義夫／平間多喜子／廣幸朝子／深澤理香／福嶋千恵子／藤井礼子／JELC藤が丘教会女性会／藤本紀子／藤原望美／淵田康穂／プラスコーポレーション／古川博子／JELC保谷教会／ホーム・ナツ／前川隆一／益永和代／松隈貞雄／南節子／南谷なほみ／宮澤真理子／宮本裕美／宗方美代子／村岡晶子／初山昭恵／森田七三郎／森田雅子／森保宏／森涼子／八坂由貴子／安みぎわ／矢田絵美／山内陽子／山口継雄／山県順子／山崎和子／山藤ふみ／山田芙美子／山本一男／山本直子／山本了／若原奇美子／渡邊加代子／渡辺聡／渡辺純子／他匿名複数

【東日本大震災被災者支援】LOVEコンサート大阪に200名を超える来場者

2007年から毎年秋にルーテル市ヶ谷教会で催され、JELAのアジア子ども支援と東日本被災者支援のために、その収益を寄付していただいている「LOVEコンサート」が、このたび地方公演として2月28日(土)午後4時から日本福音ルーテル大阪教会を会場に行われました。

このコンサートは著名なボイストレーナー安ますみさんが指導するジャズボーカリストの方々がボランティアとして出演するもので、このたびも14名のボーカルにピアノ、キーボード、ベース、ドラムを加えて、会場いっぱいに迫力あるサウンドを響かせてくれました。ジャズ、ポップスの名曲を堪能した200名を超えるお客様からは、来年もぜひというリクエストも頂き、出演者の方々も大変喜んでいました。

大阪教会を通して頂いた寄付金は、31万円余りになりました。東北の被災者にハープと歌による祈りを届ける「リラ・プレカリア」(祈りのたて琴)の活動のために用いさせていただきます。ご来場いただいた皆様、またスタッフ関係者の皆様ありがとうございました。

東日本大震災被災者支援の記事は、4ページにも掲載しています。ご覧ください。



支援者一覧

(2014年10月1日～2015年1月31日)

穂田信子／油木なな子／阿部光成／荒井和子／安藤淑子／飯島喜久江／池上幸子／池田賢治／石川史史・美代子／石森京子／JELC市ヶ谷教会／市原周子／伊東理津子／井上渥子／井上新／井上秀樹／茨城カトリックセンター／岩越優子／ヴァイラージュ／宇賀神智子／梅田満枝／浦和ルーテル学院小中高等学校／塔淑代／大石千絵／JELC大分教会／JELC大垣教会女性会／太田立男／大中原真理／岡田雅代／小澤あき子／織田有紀子／大嶺裕司・可代・十六夜／賀来周一／柿沢純江／加藤拓未／加藤紘子／JELC蒲田教会女性会／神谷智子／九州学院みどり幼稚園／京谷信代／倉重みどり／JELC神水教会学校／JELC小石川教会／向笠恵子／小松由美／小宮俊作・武子／今野七重／斉藤正恵／志賀育代／新角房子／菅谷広子／杉浦りえ／鈴木直子／鈴木やす／高尾堯／高橋進／高橋悠美子／竹淵三和子／田

ご支援ありがとうございます。匿名をご希望の場合は、ご送金の際にお知らせ下さい。

【編集余話】

ひどく混んだ通勤電車内でスマホをいじくる人がいる。こちらの身体に機器が触れているのを無視して操作を続ける輩には「無礼者!」と言いたいが、災難を恐れて我慢する。目の前や真横の席の御仁がスマホに熱中している場合も要注意。画面操作のせわしない動きが気になり、読書に浸れないからだ。仕方なく、「メタボ腹スマホよけつつ凹ませる」と川柳を頭の中で詠むか、ひと眠りすることにしている。こういう環境のせいか、聖書の黄金律が最近よく浮かぶ。「人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい」だ。これには「してほしくないことは人にもするな」という意味も含まれるだろう。車内が黄金律に支配され「通勤スマホ地獄」から脱出できる日を待ちこがれているが、当分来そうにない。(M)

JELAの活動にご支援を!
各種献金のご送金は下記をご利用下さい。

JELA
Japan Evangelical Lutheran Association

一般社団法人日本福音ルーテル社団
〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿1-20-26
Tel.03-3447-1521 Fax.03-3447-1523
Email: jela@jela.or.jp
HP: http://www.jela.or.jp
郵便振替口座番号: 00140-0-669206
加入者名: 一般社団法人日本福音ルーテル社団